

討論論文

## 統合に向けて

—外発的動機づけと内発的動機づけの関係—

名古屋大学 速水敏彦

### 1. 外発对内発という図式への疑問

わが国の教育界では70年代半ば頃から内発的動機づけとか知的好奇心ということが理想的な教育のひとつのキーワードとして位置づけられ、今日に至っているように思われる。波多野・稲垣（1973）の名著「知的好奇心」や波多野（1980）の「自己学習能力を育てる」などはそのような教育界の動きに大きなインパクトを与えた書物であろう。このような書物の中の「人間は怠け者ではない」「学習に内在する喜びがある」「学習者中心の教育」といったような言葉は実に心地よい響きをもち、教材や課題提示の工夫、授業形態の工夫など内発的動機づけを高める試みが熱心になされてきた。

そして、内発的動機づけが重視されればされるほど、従来の賞罰を中心とした外発的動機づけは教育界では悪者視されるような傾向が強まってきた。学問的にも、本来、内発的動機づけの高い人たちに外発的報酬を与えると内発的動機づけが低減するという実証的研究がいくつか発表され（Lepper, Green & Nisbett, 1973; Deci 1971）、内発的動機づけと外発的動機づけは文字通り相対立するものとしてその距離はますます遠くなった感がある。

だが、両者はほんとうに対立する側面ばかりであろうか。現実の教育場面を詳細に観察すると一見巧みな課題提示がなされ、見事な導入によって内発的に動機づけられているかに見える教室も、それ以前に授業に集中するかなり厳しい訓練がなされていたり、教師から個々の子ども長所を見抜いた適切な称賛がなされていることが多い。事前の外発的動機づけは後の内発的動機づけを阻害するのではなく、促進しているように思われる事例もまた多いのである。筆者自身、教育場面で内発的動機づけと外発的動機づけが乖離して捉えられることの危険性についてかなり以前から指摘してきたが（速水 1989）、まだ、そのような見方があまり学会にも浸透していない段階にある。一方、外国ではRyan（1993）によって外発的動機づけと内発的動機づけの連続性ということが指摘され始め、従来の概念的枠組みを見直そうという動きがある。

### 2 論者の主張とそれに対する若干のコメント

まず、ここでは論者たちの視点を整理し、それに対して筆者なりに疑問を抱いた点についてふれたい。

倉八氏には外国語学習の研究者として主に英語学習の動機づけの発達を論じていただいた。氏は、「英語学習の目標自体が『外発的動機づけ』によって与えられ、内面化していくもので、学びの過程で繰り返し『外発的に』動機づけられることによって、学びはよい方向に発展していく」として外発的動機づけの役割を強調している。これは基本的には内発的動機づけは外発的動機づけによって生成されていくという考えにそっており、外発的動機づけは内発的動機づけを阻害するのではなく、促進するものとして捉えられているものと思われる。つまり、氏は外国語学習の必然性が感じられにくい日本にあって、外国語学習の主要な2つの目標、統合的志向性と道具的志向性を引き出す外的条件を提供していく

ことの重要性を説かれている。

ただ、統合的志向性の内発的動機づけと道具的志向性の外発的動機づけとの距離はかなり異なるように思われるが、その後の議論が両者の相違を十分意識したものでないのは残念な気がする。また、4章の終わりで氏はB1のタイプの学生もラジオ、語学研修など身近で役立つと思われる条件を与えていけば、葛藤状態から抜け出せるであろうと考えておられるが、これはややオプテミステックな見方であるような気がする。これまでに形成された強い無力感のようなものを払拭するような、かなり方向性の強度な外発的動機づけがまず必要であるように私には思われる。

前原氏は学習目標という視点から迫り、子どもが認知する教科の学習目標を分析することをとおして内発的動機づけと外発的動機づけの関係を明らかにしようと試みている。そして、子どもたちが各教科を「～の時に役立つ」というかたちで表現したものを有益性の認知と命名した。これは、子どもの側に立ったユニークな目標概念といえる。さらに、氏は有益性認知による動機づけは単純に外発的動機づけと考えるわけにはいかないと指摘する。社会化の過程で自律していく中で有益性の認知も内面化していくものと考えられる。それ故、自己目標にそって自律的に学習しようという意味では有益性認知による学習は内発的動機づけとみることでもできると認識されているものと推察される。各教科における有益性の認知の研究は興味深い。

しかし、調査的には子どもの応答は可能であったとしても、小学高学年の子どもたちが常にこのような教科ごとにかかなり細分化された有益性を意識して学習に取り組んでいるとは考えがたいところがある。また、これは蛇足的なことだが、この調査のみで国語がもっとも有益性が高いという結論を導くのはやや早計である気がする。被験者のサンプリング、項目のサンプリングの問題などが残されているように思われる。

北尾氏は学習の動機づけの基本要因として学習課題が学ぶに値する否か、自己価値を高めようとしているか否か、教師の魅力や指導力をあげ、これらの3者が複雑に相互作用して動機づけの質的相違が生じるとする。そして、外発・内発の二分法の従来の考えを学習内在型対学習外在型、自己実現型対自己防衛型の二次元分類へ吸収、統合するという提案をしている。学習課題、生徒、教師の複雑な相互作用の指摘は現場研究に長く関わっておられる氏の深い洞察に基づくものと思われる。

ただ、そのような現実の複雑さ、あるいは偶然さを認識しながらも氏は最後には話をわかりやすくするために二次元分類を提言しておられるが、そこにやや無理が感じられないわけでもない。学習内在型か学習外在型か、あるいは自己実現型か自己防衛型かは基本的には連続性があり、同一人物でもどちらに位置づくか微妙な外的変化によって変動することも十分考えられる。また、学習内在型が価値をも含む概念であるとする自己実現型とかなり近似した概念設定になるようにも思われるが如何なものだろうか。

三氏はこのようにそれぞれの視点から興味深い独自の考えを提起しておられるが、基本的なところでは2つの動機づけの考え方に対して共通点が多く見いだされるように思われる。

### 3 内発的動機づけをどう定義するか

さて、一言で「内発的動機づけ」といっても実は様々な定義の仕方があることは既に鹿毛(1994)によっても指摘されている。では、ここでのシンポジストたちはそれをどのように定義しているのだろうか。

まず、倉八氏は「この場合、『内発的に』には本人自身が必要性を感じとって学ぶという行動の自発性を意味し、『外発的に』とは本人自身は必要性を感じとっておらず、他者からの導きによって行動

が開始されるという行動の他発性を意味する」としている。

続く前原氏は内発的動機づけの概念について明解な記述はしていないが「学習の有益性認知による動機づけでは、むしろ、外発的動機づけと内発的動機づけの境界を明確化できそうにない。」としている。そして、その後で自己成長の欲求が重要な働きをすることを述べ、それが内発的動機づけの中核的な概念であることを仄めかしているように私には思われる。

北尾氏は「元々の定義からすれば、内発的動機づけは学習内在型の動機づけに対応するものと考えられよう。Hunt (1963)はこの動機づけについて“情報処理や活動に内在する (inherent) 動機づけ”と説明しているのでこれを教育場面にあてはめると学習活動に内在する動機づけが内発的動機づけであるといえる」としている。ただし、氏のいう学習内在型というのは価値意識も含めた概念であり、前原氏のいう有益性の認知と共通する側面を含むものと考えられ、従来よりは広義の概念になっているように思われる。続けて氏は「しかし、この概念を心理学から教育実践の場へと拡張し、教育用語としての意味を持たせると、学習内在型に限定することはむずかしくなった。」とし、「自発的・能動的な特徴がみられる場合を内発的とし、逆に受動的・消極的な特徴がみられる場合を（主として他からの指示、命令に従う場合）を外発的と考えるようになった」としている。そして、自己実現型の動機づけこそ内発的動機づけの中核的なものと考えているようである。

北尾氏が明確に記述しているように、これまで内発的動機づけというと手段的行動でなく、目的的行動を引き起こすものとして定義される場合が多かったように思われるが、たとえ、手段的行動であったとしても、それが自発的、自律的なものであれば内発的動機づけとして位置づけるべきではないかというのが3者共通に流れている考え方のように思われる。このような論点は速水 (1995) や Ryan ら (1993) の内発的動機づけの捉え方と一致していよう。ただ、速水は目的的なもの、学習内在的なものの中にすら他律的、他発的なものがあると考えているが、北尾氏の場合、学習内在型の動機づけが自己防衛型の動機づけである場合があるかどうかは明言していない。先にも触れたように氏は自己実現の動機づけの対極として自己防衛的な動機づけをあげている。これは Ryan の同一化的動機づけと取り入れ動的動機づけに相当しているように感じられる。ただし、Ryan の場合は両概念は隣接する概念であるとして捉えているところが異なるように思われる。

#### 4 社会の中で形成されていく内発的動機づけ

内発的動機づけを目的的行動を揺り動かすものとして捉えると、知的好奇心だとかコンピテンスといった内容が中心になり、人が生得的に持ち合わせた性質としてみる向きが強く、「人は怠け者ではない」といった命題さえ絶対的なもののように提案されてきた。しかしながら、内発的動機づけを自発的行動を支えるものとか、自律的行動の背後にあるものとか、自己決定された行動を動かすものというように定義すると、それは社会や環境からの様々な働きかけを受けて個人の中に自発性や自律性を形成していく中で生じてくるものと考えた方がよさそうである。社会や環境からの働きかけは最初の段階ではやはり外発的な動機づけが多いように思われる。しかし、社会化の過程で社会の価値が次第に個人の中に浸透し、内面化していくことになる。そして、前原氏の言葉を借りれば、「社会的基準が子どもの中に取り入れられるかどうかは、受け身的にはなく、能動的に、子ども自身との基準との間で調整される。」つまり、本人自身が自ら何らかの行動を選択し、自ら努力していけばそれは内発的に動機づけられているといえよう。

ただし、ここで論者たちは触れていないがこの誌上で論じられているのは主に青年期以降の内発的動機づけの様相であることに注意する必要があるだろう。自分の判断で多くの行動の選択肢の中から選択して

いくことは一定の思考力を要することなのである。幼い時期での内発的動機づけは社会化の過程で形成される価値といったものとはほとんど無縁のものであり、生得的な側面が強く、外発的動機づけとは入れない面が多いと考えられる。

## 5 外からの動機づけを内への動機づけへと統合するもの

ところで、先生や親からのいわば外発的動機づけはどのようにしたら、あるいはどのような条件下で内発的動機づけに転換することができるだろうか。特に倉八氏の扱っておられるような外国語学習の授業などではすぐにでもこの回答を得たいというのが本当のところであろう。しかし、この問いには我々はまだ十分に答えるだけの研究を積み重ねていない。北尾氏がワイナーを引用して述べているように社会や文化の要因も大きいであろう。しかし、最も重要なのはやはり社会化の担い手である親や先生の要因であろう。動機づけというのはかなり偶然的なものにも左右され、先生の雑談中の何気ない一言が子どもの自発的な動機づけを一気に喚起したり、逆に動機づけを喪失させることもある。自律的行動ということが重視されるとすれば、子どもの自律性をどのように支援するかということがキイになろう。もちろん、自律とは放任し、子どもにすべてを任せることを意味しない。子どもが一定のことができるまで適切な方向付けをしながら、自分でできる力がついていけば徐々にその方向付けを取り除いていくことが肝心であろう。学習の価値づけが大切だといっても外からその働きかけがあまりに強ければ、動機づけを内面化させることはできず、かえって妨害的に働くであろう。しかし、何も周りが働きかけなければ、学習の重大さや有益性はなかなか伝わらない。この適度な働きかけは個人差もあり、なかなか複雑である。もちろん、適切な方向付けや外発的動機づけを本人の中に素直に取り込んでいくためには社会化の担い手との間に親密な人間関係ができていくことが前提になる。

ともかく、そこにはかなり複雑で個人的に多様な心理的メカニズムが存在すると考えられるが、今後少しずつでも解き明かし教育につなげていく姿勢が必要であろう。ただ、この誌上シンポジウムを企画した筆者としてはこの議論によって内発的動機づけは外発的動機づけと完全に対置したものでなく、発達する過程で外発的動機づけを吸収し統合し、形成されていくものだという認識がいくぶん確かなものになったと感じている。

## 引用文献

- Deci, E. L. 1971 Effects of externally mediated rewards on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 18, 105-115.
- 波多野諄余夫 1980 自己学習能力を育てる 東京大学出版会
- 波多野諄余夫・稲垣佳世子 1973 知的好奇心 中公新書
- 速水敏彦 1989 動機づけ 橋口英俊他編 児童心理学の進歩 1989年版 金子書房 171-198
- 速水敏彦 1995 外発と内発の間としての達成動機づけ 心理学評論 38 171-193.
- Lepper, M. R., & Greene, D., & Nisbett, R. E. 1973 Undermining children's intrinsic with extrinsic rewards: A test of the overjustification hypothesis. *Journal of Personality and Social Psychology*, 28, 129-137.
- Ryan, R. M. 1993 Agency and organization: Intrinsic motivation, autonomy, and the self in psychological development J. E. Jacobs (Ed.) *Developmental perspectives on motivation*. (Nebraska Symposium on Motivation 1992) University of Nebraska Press, 1-56.